

報告書

REPORT

平成20年10月11日～11月30日開催

October 11–November 30, 2008

文化の
多様性



文化力発信！日本から世界へ

Spreading the "Power of Culture" from Japan



World

Cultural Forum

2008

文化庁 第6回 国際文化フォーラム

World Cultural Forum 2008

'08

主催 文化庁／日本経済新聞社／NHK／関西元気文化圏推進協議会

Agency for Cultural Affairs, Japan

<http://www.bunka.go.jp/culturalforum/>

第6回 国際文化フォーラム 報告書

目次

国際文化フォーラムの概要	1
第6回国際文化フォーラム開催日程	2
参加行事	2

開会基調講演・パフォーマンス・座談会 I

「文化の多様性」～文化の力が世界をつなぐ～

開催概要・プログラム	4
開会基調講演者及びパフォーマンス出演者プロフィール	4
座談会I パネリストプロフィール	5
開催記録写真	6
開会基調講演・パフォーマンス・座談会I サマリー	8
開会基調講演 マイク・モラスキー	9
座談会I 「現代日本の音楽と文化」 ～様々なジャンルで育まれた音楽の力～ サマリー	14

座談会 II

「古典に生きる」～未来を拓く古典、『源氏物語』～

開催概要・プログラム	16
パネリストプロフィール	17
開催記録写真	18
サマリー	20

座談会 III

「奈良とシルクロード」～アジアゲートウェイの未来に向けて～

開催概要・プログラム	22
パネリストプロフィール	23
開催記録写真	24
サマリー	26
日本経済新聞特集記事	61

英文は、27ページ以降に掲載しています。
The English version is on page 27 and later.

国際文化フォーラムの概要

国際文化フォーラムとは

国際文化フォーラムは、内外の著名な文化人・芸術家が世界の文化の最新情報や文化をとりまく課題に関する知見を、講演・討論を通じて交換する場を提供するとともに、日本の文化発信の「顔」となる催しとして開催します。

「関西元気文化圏」※の中心事業として

第6回国際文化フォーラムは、文化庁が提唱する「日本の社会を文化で元気にしよう」という取り組みの一環として推進している「関西元気文化圏」の中心事業として開催されるものです。

第6回国際文化フォーラム・・・

第6回国際文化フォーラムでは、「文化の多様性」を大きなテーマに、開会基調講演等のほか3つの座談会が開催されます。フォーラムの各セッションは、東京及び関西において、世界の文化人が議論を交わし、世界に向けて文化のメッセージを発信し、日本文化を広く伝えます。

※「関西元気文化圏」とは

日本各地で素晴らしい活動をしている多くの方々の元気、底力、そして日本の文化を、まず歴史と文化の蓄積がある関西から、力強く発信することをねらいとして、関西地域の経済団体や地方公共団体等が連携し、「文化力」ロゴマークやホームページを活用した広報活動など、多様な文化活動の展開による関西文化圏の一体化・活性化に取り組んでいます。



第6回国際文化フォーラム開催日程

開会基調講演・パフォーマンス・座談会 I

「文化の多様性」～文化の力が世界をつなぐ～

開会基調講演 「音楽という出会い」～異文化のふれあいが生み出す音の世界～

パフォーマンス 「日伯交流年記念演奏」～ブラジリアンミュージック～

座談会 I 「現代日本の音楽と文化」～様々なジャンルの「受容」で育まれた音楽の力～

東京国際交流館プラザ平成 国際交流会議場 2008年10月11日(土) 13:30～17:30

座談会 II

「古典に生きる」～未来を拓く古典、『源氏物語』～

宇治市文化センター 大ホール 2008年11月9日(日) 13:30～17:30

座談会 III

「奈良とシルクロード」～アジアゲートウェイの未来に向けて～

興福寺会館 2008年11月30日(日) 13:30～17:00

開会基調講演・パフォーマンス・座談会 I

「文化の多様性」

～文化の力が世界をつなぐ～

参加行事

- 現代美術への視点6 エモーショナル・ドローイング
- 生活と芸術—アーツ&クラフツ展
- 芸術都市パリの100年展—ルノワール、セザンヌ、ユトリ口の生きた街 1830—1930年
- 特別展「スリランカ—輝く島の美に会う」
- 特別展「衣の昔—おばあちゃんが子どもだったころ—」
- アジアとヨーロッパの肖像 Self and Other
- ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情
- 巨匠ピカソ 愛と創造の軌跡
- 平成20年度(第63回)文化庁芸術祭主催 国立劇場10月歌舞伎公演 北條秀司十三回忌追善「大老」
- 奈良県立橿原考古学研究所創立70周年記念 秋季特別展「宮都 飛鳥」
- 尾形光琳生誕350周年記念「大琳派展—継承と変奏—」
- 創立250周年記念 ウェッジウッド—ヨーロッパ陶磁器デザインの歴史—
- 京の華舞台 ①「優雅の双奏」
- 京の華舞台 ②「もののあはれ」
- 秋期特別展「まぼろしの唐代精華—黄治唐三彩窯の考古新発見—」
- 特別展覧会「japan 蒔絵—宮殿を飾る 東洋の燦めき—」
- 特別展 没後400年「木食応其OGO —秀吉から高野山を救った僧—」
- 特別展 生誕100年記念 田中一村展 原初へのまなざし
- 京都市交響楽団第517、518回定期演奏会
- 第24回 日韓三大学 デザイン・美術交流展
- 第60回正倉院展
- アール・ブリュット—パリ、abcdコレクションより—
- 特別展 国立能楽堂コレクション展—能の雅 狂言の妙—
- 源氏物語国際フォーラム
- 京都市国際交流会館オープンデイ2008
- エモーショナル・ドローイング
- デヴィッド・ビントレーのアラジン
- 京都市美術館コレクション展 第3期「ふたつで一つ」
- 国立劇場11月舞踊公演「舞の会—京阪の座敷舞—」

開会基調講演・パフォーマンス・座談会 I

「文化の多様性」～文化の力が世界をつなぐ～

「文化の多様性」を共通主題にすえた第6回国際文化フォーラムの開会は、マイク・モラスキー教授による基調講演・日伯交流年の記念演奏に続き、座談会「現代日本の音楽と文化」を開催する。

開催概要	プログラム
<p>■日時 平成20年10月11日(土) 13:30～17:30</p> <p>■会場 東京国際交流館プラザ平成 国際交流会議場(東京都江東区青海2-79)</p> <p>■主催 文化庁、日本経済新聞社、NHK</p>	<p>13:30 開会(演奏:Kokoo) 挨拶 開会基調講演:マイク・モラスキー パフォーマンス:日伯交流年記念演奏 (休憩) 座談会:「現代日本の音楽と文化」 ～様々なジャンルの「受容」で育まれた音楽の力～ パフォーマンス:角田健一ビッグバンド</p> <p>17:30 閉会</p>

開会基調講演 「音楽という出会い」～異文化のふれあいが生み出す音の世界～



©和田直樹

マイク・モラスキー

ミネソタ大学教授

米国

米国シカゴ大学大学院にて日本文学の博士号取得。現米国ミネソタ大学アジア言語文学学科教授。日本およびフランスの複数の大学、研究所に客員研究員として所属。専門分野は戦後日本および沖縄文学からジャズ研究、音楽文化と幅広い。日本語の著書は、『戦後日本のジャズ文化』(青土社、2005年、2006年度のサントリー学芸賞受賞)、『占領の記憶/記憶の占領——戦後の沖縄・日本とアメリカ』(青土社、2006年、鈴木直子、訳)、『その言葉、異議あり!——笑える日米文化批評集』(中央公論新社、中公新書ラクレ、2007年)など多数。セミプロのジャズ・ピアニストでもあり、(故)山口五郎師(重要無形文化財(各個認定)保持者*)に古典尺八を六年間師事したこともある。

*いわゆる人間国宝

パフォーマンス 日伯交流年記念演奏 ～ブラジリアンミュージック～



ヴィウマ・ジ・オリヴェイラ

歌手

ブラジル

ブラジル・サンパウロ出身。1969年にプロ・シンガーとしてデビュー。サンパウロの有名クラブで活躍するほか「オルフェウ・ネグロウ」、「ミュージック・ショー」などのメンバーとしてブラジル国内をツアー。1986年に来日し、四ツ谷サッシペレレでライブ活動を開始。レパートリーはボサノバ、サンバ、サンバ・カンサオン、ショーロ、MPBと300曲を超え、まさにブラジリアン・ミュージックの生き字引。彼女から古典的名曲を教わった人々は少なくない。CMでも多く活躍。現在はライブハウスやイベント、レコーディングなど休みなく歌い続ける傍ら、後進の指導にも力を入れている。

座談会 I 「現代日本の音楽と文化」～様々なジャンルの「受容」で育まれた音楽の力～

伝統音楽から、ジャズ、クラシック、ポップスなど現代音楽まで、音楽は多彩な広がりを持つ世界共通の芸術文化である。グローバル化が進むなか、日本における様々なジャンルの音楽の受容と発展の歴史に触れつつ、音楽の持つ「文化力」について考える。



青木 保

文化庁長官

あおき たもつ

人間科学博士。文化人類学、比較文化論を専門分野とし、大阪大学教授、東京大学教授、政策研究大学院大学教授、早稲田大学アジア研究機構教授を経て、2007年4月より文化庁長官。この間、米ハーバード大学客員研究員、仏国立パリ社会科学高等研究員客員教授、独コンスタンツ大学客員教授なども務める。タイ、スリランカなどのアジア諸国、欧米各国等の文化人類学や文化政策の調査研究に従事。サントリー学芸賞受賞、吉野作造賞、紫綬褒章を受賞。『儀礼の象徴性』『日本文化論の変容』『逆光のオリエンタリズム』『異文化理解』など著書は多数。



©和田直樹

マイク・モラスキー

ミネソタ大学教授

米国

詳細は左ページ参照



角田 健一

角田健一ビッグバンドリーダー、作・編曲家

つのだ けんいち

東京芸術大学別科終了、桐朋学園大学音楽学部卒業、米国パークリー音楽大学卒業。宮間利之とニューハード、原信夫とシャープス&フラッツ、東京ユニオンを経て、'90年角田健一ビッグバンドを結成、自身の作、編曲で人気を博す。'94年武満徹の書いたジャズに出会い影響を受け、2001年「デューク・エリントンと武満徹」と題した公演を開催、ビッグバンドの新境地を開拓し高い評価を得る。現在はツノケンバンドの他、吹奏楽の分野でも活動。'07年の定期公演「もうひとつの武満徹」(平成19年度文化庁芸術祭の優秀賞受賞)では自作曲を含む作・編曲面での輝かしい成果が高く評価された。



©Ryusei Kojima

本名 徹次

オーケストラ・ニッポニカ音楽監督、ベトナム国立交響楽団ミュージックアドバイザー兼指揮者

ほんな てつじ

郡山市生まれ。指揮を井上道義、山田一雄に師事。1985年東京国際音楽コンクール指揮部門最高位、1990年アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクール第2位、1992年ハンガリー・ブダペスト国際指揮者コンクールにて第1位とバルトーク賞受賞。文化庁芸術選奨・文部大臣賞新人賞、松村賞、新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、大阪府舞台芸術奨励賞などを受賞。国内を始め、ヨーロッパのオーケストラを多数指揮。1995年～2001年大阪シンフォニカー交響楽団常任指揮者、1998年～2001年名古屋フィルハーモニー交響楽団客演常任指揮者を兼務した。



宮田 まゆみ

笙奏者

みやた まゆみ

国立音楽大学ピアノ科卒業後、雅楽を学ぶ。東洋の伝統楽器「笙」を国際的に広めた第一人者。古典雅楽はもとより、武満徹、ジョン・ケージなど現代作品の初演も数多く、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラ、C.デュトワ指揮NHK交響楽団、A.プレヴィン指揮ニューヨーク・フィル、V.アシュケナー指揮チェコ・フィルほか国内外のトップオーケストラと数多く共演。加えて、H.ラッヘンマン作曲のオペラへの出演、ルツェルン、シュレスヴィヒ・ホルシュタインをはじめとする各国の音楽祭への参加、ウィーン、ニューヨーク、ミラノなどでのリサイタルと幅広く活躍している。'98年の長野オリンピック開会式での「君が代」演奏の模様は全国中継され、全世界からの注目を集めた。



角田健一ビッグバンド

1990年結成。レパートリーのすべてを角田が作、編曲、「スイングから武満徹まで」と幅広い。デビット・サンボーン、シカゴ、チャーリー・バッシューなどと共演。CDは7枚、その内3枚は米国シーブリーズレコード社より全米リリース。定期公演は結成時から毎年開催。また、小、中、高の学校鑑賞教室も積極的に行いジャズの普及にも力を入れている。2007年、定期公演「もうひとつの武満徹」は平成19年度文化庁芸術祭大衆芸能部門優秀賞を受賞。

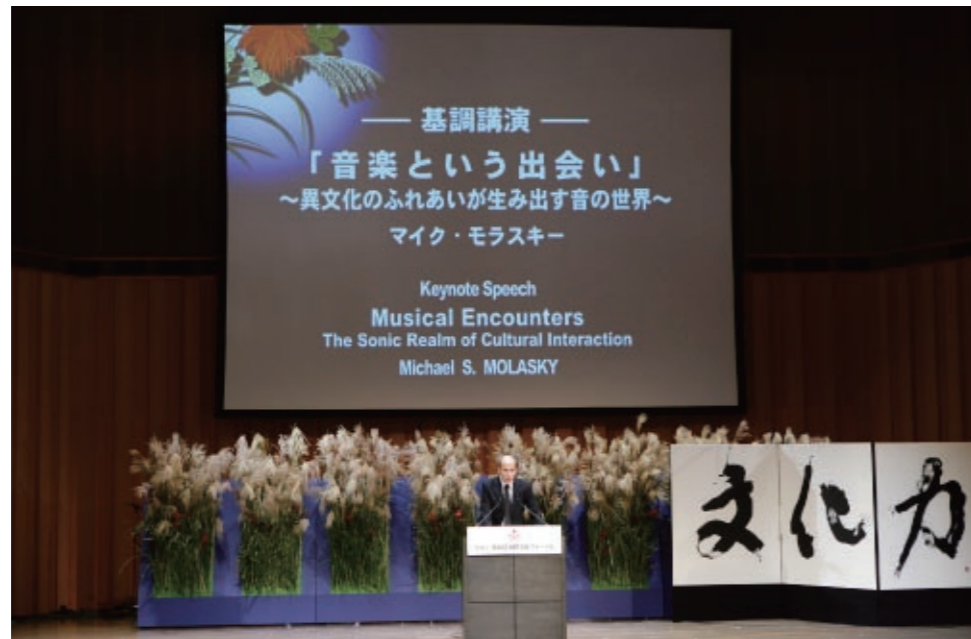
開催記念写真



青木保文化庁長官の開会挨拶



開会基調講演
流暢な日本語で語るマイク・モラスキー氏



開会基調講演時のステージ



Kokooによる演奏と
書家・柿沼康二氏の映像によるオープニング



日伯交流年記念演奏
ヴィウマ・ジ・オリヴェイラ氏



座談会を進行する
青木文化庁長官



日本的なジャズについて語る
角田健一氏



ベトナム在住の視点から語る
本名徹次氏



雅楽について語り、笙の演奏を披露した
宮田まゆみ氏



問題提起する
モラスキー氏



座談会参加者たち



力強い演奏を披露する角田健一ビッグバンド



「文化の多様性」 ～文化の力が世界をつなぐ～

平成20年10月11日(土) 13:30～17:30
東京国際交流館プラザ平成 国際交流会議場 (東京都江東区)

「文化の多様性」を共通テーマに、内外の著名な文化人や芸術家が文化芸術をとりまく世界の最新情報と課題に関する知見について交換する文化庁 第6回国際文化フォーラム(文化庁、日本経済新聞社、NHK等主催)が平成20年10月11日より始まった。初日は東京国際交流館の国際交流会議場を会場とし、開会基調講演、記念演奏および座談会「現代日本の音楽と文化」が開催された。

はじめに尺八(中村明一)、二十絃箏(八木美知依)、十七絃箏(磯貝真紀)の3人から構成されるグループ ^{コクウ}Kokooによる演奏“Zoom”に合わせて、スクリーンには書家の柿沼康二氏による書のパフォーマンス映像が映し出され、国際文化フォーラムの幕が開けた。

続いて青木保文化庁長官による主催者挨拶の後、米国ミネソタ大学アジア言語文学学科教授であると同時に日本のジャズ文化研究者であり、またセミプロのジャズピアニストでもあるマイク・モラスキー氏による開会基調講演が行われた。

モラスキー氏は「音楽という出会い」というテーマのもと、まず自身の32年前の新宿でのジャズ喫茶との出会いについて語り、現在研究中である日本独自の文化、ジャズ喫茶文化について言及した。さらに、約3年前、パリでアフリカの楽器「コーラ」と西洋の楽器ハープとの偶然によるライブ共演を聴いた感動について触れ、音楽には異文化の壁を乗り越え、世界をつなぐ力があると語った。

次に日伯交流年記念演奏として、サンパウロ生まれのボサノバ歌手ヴィウマ・ジ・オリヴェイラが、ギター、パーカッションをバックにブラジル音楽を披露した。

その後、休憩をはさんだ第2部として「現代日本の音楽と文化」をテーマにした座談会が行われ、パネリストによる活発な議論に多数の観客が聞き入った。座談会の後には角田健一ビッグバンドによるジャズ演奏が披露され、様々な音楽に彩られての国際文化フォーラム開会となった。

「音楽という出会い」 ～異文化のふれあいが生み出す音の世界～

マイク・モラスキー
(ミネソタ大学教授)

モラスキーでございます。どうぞよろしくお願いたします。まさか私のような「ちょいワル学者」が文化庁にご依頼をいただき、このような立派なフォーラムで基調講演をすることになるとは、夢にも、悪夢にも、予想だにしませんでした。しかし、大勢の前で恥をかく機会を与えていただくと断れないという自虐的な性格ですから、今日ここで皆様の前に立っております。これからしばらく、訛りのある不自然な日本語で、とりとめのない話をご披露することになるとは思いますが、どうぞ辛抱くださいますようお願いいたします。また、一昨日アメリカから飛行機に乗って飛んで来たばかりなので、時差ボケで途中で皆様より先に私が寝てしまう恐れがありますが、その場合は声をかけてください。

では、ある小話からはじめさせていただきます。

1976年9月上旬。ふさふさの天然パーマをした、無邪気なアメリカ人青年が、一人で山手線に乗っている。留学のために来日してから一週間も経っていない。日本語を喋ろうにもまだたどたどしく、電車が走る町に生活することすら初めてである。ただ、旺盛な好奇心と、そして世間知らずの若者に特有の冒険心のおかげで、どこまでも一人で出かける度胸はある。

電車が新宿に近づくと、彼は内心「面白そうな町だから降りてみようじゃないか」と思ったその瞬間、車両のドアが開き、そのままごみに飲み込まれて流されてしまう。流れに逆らっても身動きできそうにない。魚の群れの中の一匹の小魚に化けたと想像する青年は、即座に状況を分析して、対策を講じる。「周りの魚と一定の距離を保ちながら同じ速度で進めば、きっと大丈夫だろう」と決める。それから青年は考えることを一切放棄して、流れに身を任せる。徐々に流れと一体化してくると、青年はすすると前進できることに気づいて、奇妙な陶酔感さえ覚える。だが改札口から吐き出されると、突然、魚の群れも一気に解散してしまう。そこで青年は「また陸に足が着いたようだ」と、ふと我に返る。

新宿駅東口である。

階段を上って駅前の広場に出ると、別世界が青年を待ち構えている。暗いスーツ姿のサラリーマンがテキパキせかせか、ジーパンとスニーカーをはいた学生たちがノンビリだらだら、そして長髪の浮浪者とヒッピー風の若者たちがウロウロごろごろしている。そのウロウロごろごろ族の中にいる、一人の、やや乱れた格好の娘が青年の目を引く。その娘は地面にぼつんと座って、なぜか定期的に顔を紙袋につけて、深く息を吸っている。「どうもサンドイッチを食べているようではないみたいだな…」不思議がりながら青年は娘と広場を後にして、学生たちに倣ってノンビリだらだらと当てもなく歩き出す。

見知らぬ風景、聞き取れぬ言葉の洪水、読めぬ漢字の氾濫、嗅いだことのない匂い…青年にとって何もかも新鮮で刺激的である。一方、あまりにもすべてが異質であるので、彼は戸惑いを感じ始める。

その瞬間である。聴き慣れた音が、ふいに町の雑音の中からかすかに耳に届く。大好きなモダン・ジャズである。どこかのスピーカーから流れているらしい。青年は懸命に音源の場所を突き止めようとする。ほどなく、その足がふと止まる。目の前に“Modern Jazz and Coffee”という看板が立っているではないか。なじみ深い音のおかげで、一種の安全地帯にようやく辿り着いた…そう確信して、ほっとした青年が店に通じる階段を下りる。

ところが…ドアを開けてみると、思いがけない異様な世界が展開される。思わず耳を塞ぎたくなるほどの大音量で音楽が鳴っている。アメリカで聴き慣れてきたジャズ演奏や、自宅にある安っぽいオーディオやラジオで聴いてきた音量とは雲泥の差で、むしろそれはロック・コンサートを思わせる爆音に匹敵するほどである。

店内の風景も実に異様に映る。霧がかかった夕暮れのごとく、目を凝らさないと何も判別できない。店内は暗く、しかも青い煙が重々しく漂っている。徐々に目が慣れてくると、椅子に座る人たちの姿が浮かび上がる。その様は人間の死体か、まるでミイラのように、首をたらし不動のまま点在している。この不気味な光景に、青年はさすがに躊躇するが、結局流れているジャズの音に誘導され、空いている低くて黒い椅子に腰を下ろす。

今の話が私のジャズ喫茶初体験です。そして、日本の音楽文化独自の空間との出会いでもあります。その時点ですでに数年間ジャズを聴き込んでいたのですが、ジャズ喫茶というのはまったく異質な場のように思えました。流れている音楽にはなじみがあっても、その音量や、店内の雰囲気や、客たちの聴く姿勢などはまったく異様に感じたわけです。

それから32年経ちましたが、最近、あの暗い地下室に再びもぐり始めました。というのは、このごろ私が専念している研究課題は、それこそ「日本のジャズ喫茶文化」というものだからです。ここ1年間、九州から北海道まで130軒以上のジャズ喫茶に実際に足を運び、店主たちに直接お会いしてインタビューを行ってきました。そして、その数々のインタビューを通して、「ジャズ喫茶とは一体何なのか」を根源的に考え直そうとしているわけです。

今日お集まりくださっている皆様のうち、ジャズ喫茶になじみのない方もいらっしゃるかと思いますので、どんな場所なのか簡単に説明させていただきます。まず、ジャズ喫茶の絶対条件を挙げることが分かりやすいと思います。一応7つの絶対条件に分けました。

- (1) 最低でも数百枚のレコード・コレクションを有すること(できれば千枚以上が好ましい)
- (2) 一般人が所有できないほど高価で音の優れたオーディオ・システムが設置されること
- (3) 店主や店員がジャズ、とりわけジャズ・レコードに対して相当詳しいこと
- (4) ジャズのレコードだけを営業時間中、絶えずかけ続けること(ただし、ブルースやボサノバやラテン・ジャズはたまにかけても良いでしょう)
- (5) BGMに間違えられない程度の音量でレコードをかけること
- (6) 昼間も営業しており、客がコーヒー1杯だけを注文し、約2時間座っていてもヒンシュクを買わないような店であること。つまりジャズバーとも、ライブハウスとも違って、有線でBGMをかけている店とも違うというわけです。
- (7) 看板や入り口などで「ジャズ」と明記して店を宣伝すること

では、この条件を踏まえて、ごく簡潔な定義にまとめてみましょう。

「ジャズ喫茶とは、客にジャズ・レコードを聴かせることが主な目的である喫茶店のことである」

ごく単純で当たり前のように思われるかもしれませんが、いかがでしょうか。もちろん、ジャズ喫茶に行かれたことのある方でしたら、定義などは無用でしょうが、今日皆様に注目していただきたいのは、ジャズ喫茶がレコードとオーディオを中心とする場である、ということです。言い換えれば、ジャズ喫茶は「再生音源」の場所です。そしてジャズ喫茶を考えると、その全盛期だった1960年頃から'70年代初期まで、多くの日本人にとって、ジャズはいまだに「他者の音楽」、つまり「異文化の音」だったということも見逃せないと思います。

この二点、「再生音源の場」、そして「異文化の音」をさらに掘り下げるためには、ジャズ喫茶の歴史に多少触れなければなりません。

ジャズ喫茶の源泉は、昭和初期の音楽喫茶にさかのぼります。電気蓄音機という新しい音源技術によって、レコードを客に聞かせる喫茶店が、この時期から現れ始めました。名曲喫茶ではクラシック音楽、ジャズ喫茶ではジャズ、そしてたまにタンゴのレコードをかけたりしていました。ちなみに最初のジャズ喫茶が現れたのは昭和4年だと伝えられています。

店の内装も、設置されている蓄音機も、流れている音楽も、店内で出されるコーヒーやミルクなどの飲み物も、どれをとっても当時はまだ新しく、つまり「モダン」でした。そして、「モダン」＝「欧米文化」という認識が強い時代

だっただけに、初期の音楽喫茶は、単に入手困難なレコードを聞かせるだけではなく、様々な側面において欧米文化そのものの疑似体験を提供する場であったと理解するべきではないかと思います。

ある程度同じ機能が1960年から'70年代のモダンジャズ喫茶においても見られると思います。もちろん'60年代となると、コーヒーなどは新しくもなく、そもそも外来文化の一端だという認識はなくなっています。その時点で、日本においてもジャズは歴史が長く、あまり新しく感じられなかったのではないかという疑問は生じますが、実はちょうどその前後に新しいジャズ、モダンジャズというものが日本に入り始めて、若者文化の中で一世を風靡するようになりました。そのきっかけは色々ありますが、大まかに三つに分けられると思います。

一つは1958年(昭和33年)から、フランスのヌーヴェルヴァーグ映画が色々而入ってきました。「死刑台のエレベーター」とか「殺られる」とか「危険な関係」…こういった映画のテーマ音楽はほとんど一流のモダンジャズ・ミュージシャンが作ったわけですから、当時の学生たちや若い文化人たちにとって、初めてモダンジャズに接したのはそういったフランス産の映画だったということは良く伝えられています。

もう一つのきっかけは、1961年の1月にアート・ブレイキーとジャズメッセンジャーズという第一線のハードバップスタイルの、黒人ばかりのバンドが初めて日本に来て、これが一つの文化事件と言っても過言ではないほどの大騒ぎを招きました。その波に乗ってモダンジャズ喫茶が次々と出現して、全国に急増するようになりました。日本では終戦直後から1950年代半ばぐらいまで、ジャズはアメリカの陽気なダンスミュージック、つまり大衆音楽というイメージが付着していたのですが、'60年前後からアート・ブレイキーやホレス・シルバーやマイルス・デイビスなど、アメリカ黒人中心の少人数のバンドが注目され、主流を占めるようになりました。その時点からジャズがいわゆる陽気なダンスミュージックではなく、真面目な、座って静かに聴くべき音楽というイメージに塗り替えられてしまいました。

また、'60年前後から、日本の若者たちにとって、ジャズの顔が「黒く」なったと言えるように思います。つまりジャズは「黒人の音楽」だと認識されることによって、その音楽を提供するジャズ喫茶は、昭和初期の音楽喫茶と同様に、異なる文化の音楽を提供する役割を担っていたと理解すべきではないかと思います。

昭和初期の音楽喫茶と'60、'70年代のモダンジャズ喫茶との共通点を考えるとき、私は三つの要素を見出すことができます。それを「新たなる3K」と私は呼んでいます。つまり「危険」、「きつい」と「汚い」ではなく、「欠如」、「距離感」、そして「希少価値」です。「希少価値」にはKが二つだから4Kになるかもしれませんが(笑)。ちょっと説明させていただきます。

「欠如」に関して言うと、音楽喫茶が成り立った主な理由は、生演奏が余りなかったということです。レコードを通して聴くしかなかったので、こういう日本独自の、レコードを中心とする音楽喫茶が成り立ちました。'60年代には、日本人のミュージシャンで、高度なレベルで演奏されて活躍されていた人はいましたが、ジャズクラブはまだ余りなかったので、普通の人にとって容易に聴く機会はなかったのです。生演奏を聴く機会がなくて、そういう意味で「欠如」というのがあったわけです。

もう一つは当時輸入盤のレコードは非常に高かったことを挙げなければなりません。たとえば、一枚のアメリカ産のジャズ・レコードを買うのに、一般のサラリーマンの月給の十分の一も費やさなければならないほど高価だったのです。今の物価に例えれば恐らくCD一枚が4万とか5万円位するというようなことになるのではないかと思います。そして、もちろん学生たちが住んでいた安っぽい、薄っぺらの壁の四畳半のアパートで、仮に高級なオーディオ・システムを持つことができたとしても、大きい音で聴くことはできなかったのです。

「距離感」で言えば、地理的な距離はもちろんですが、昭和初期にしても、'60年代にしても簡単に海外旅行はとてできなかった時代です。同時に文化の面においても、現在に比べて、はるかに距離感が大きかったと思います。精神的にも、ジャズの「本場」とされているアメリカというのは非常に遠い国だという気持ちだが、やはり強かったのでしょう。だからジャズ喫茶に行って疑似体験を通してでも、その世界に音を通じて接する、というようなことはあったと思います。

「希少価値」ですが、日本には終戦直後に進駐軍、アメリカ占領軍のラジオ局でジャズ番組がありましたが、例えば長時間のジャズ専用のラジオ番組はほとんどなかったようです。アメリカには大体の都会だったらありましたし、ヨーロッパでもあったのではないかと思います。日本にはあまりなかったようなので、ジャズを聴きたかったら

ジャズ喫茶に行く他なかったという状況だったといえるでしょう。逆に現在を考えればどれだけ希少価値が下がったかということはずぐ分かります。というのは、どこの蕎麦屋に行ってもラーメン屋に行っても居酒屋に行ってもジャズの有線放送がかかっているではありませんか。「何でこんな店にジャズが流れているのか？」と不思議に思うほど氾濫しているので、現在は何もジャズ喫茶に行かなくても、あちこちで聴くことができます。

さて、ジャズ喫茶を少し置いておいて、もうひとつの体験談をお許しいただきたいです。

今度の舞台はパリ。約3年前のことです。そのとき、私はパリに2ヶ月滞在する機会に恵まれ、暇なとき、できるだけ市内のライブハウスに足を運ぶようにしていました。ただ、地元の音楽シーンには全然詳しくなく、フランス語もほとんどできなく、したがってよく理解できないタウン誌で情報をピックアップして出かける、といういい加減な方法でした。いわゆるワールド・ミュージックに興味があるということで(ワールド・ミュージックという呼称は好きではないのですが)、ある晩そのような音楽を宣伝している店に聴きに行くことにしました。「ワールド・ミュージック」と言えば、色々な音楽伝統あるいは色々な楽器を合わせて新しい音、新しい音楽を作り上げようという商業用語だと私は考えます。ですからワールド・ミュージックのカテゴリーにライブ演奏がリストアップされていても、実際にどんな音楽なのかは、まったく予想がつかない場合がしばしばあります。結局、あの晩もそうでした。

そのクラブはパリの北の地区にある、ちょっと怪しい町にあって、実際に行ってみたら、「ここは普通の観光客が行くところではないな」と思いました(ただし、私は自分が「普通」でも観光客でもない、と勝手に決めているので、その点は問題ではありませんでした)。その街角にはヨーロッパ系白人はほとんど見かけることがなく、パリ在住の北アフリカあるいはアフリカの移民らしき人が多かったです。つまり私にとって、さらなる〈異文化の場〉だったといえるでしょうが、32年前の、あのジャズ喫茶と同じように、この店もビルの地下にありました。その建物を見つけた私は、再び知らぬ世界に通じる階段を下りて行きました。

今度はドアを開けてみると、かなりぼろぼろの店内と、若い(これは不思議なことにほとんど白人ばかりの)客層が目に入りました。まだ演奏は始まっていなかったのですが、楽器がすでにステージの上にセッティングされていました。さすがにジャンルを超える「ワールド・ミュージック」らしく、色々な違う伝統の楽器がそこに置いてありました。ロック・バンドに使われるエレキギターとベース、ジャズ・バンドでよく使われるテナー・サクソ、色々な国のパーカッション楽器も置いてあり、そしてシンフォニー・オーケストラで使われるハーブが特に目立ちました。設定されたマイクの位置から察すると、ヴォーカルもこのバンドに入るだろうと思いました。一体どんな音楽が展開されるだろうかと考えながら、演奏開始を待ちました。

いよいよ演奏が始まったら、ちょっとがっかりしました。バンドは特に下手というわけではなかったのですが、色々な楽器と音楽伝統を混合させる場合よく現れる問題だと思いますが、全体のサウンドがうまくまとまらず、音楽的な方向性が見えにくかったからです。つまり、異質の音楽的要素をいくつか組み合わせるという意欲は分かりましたけれど、新しいサウンドを目指していても、それがうまくまとまらなかったように、私の耳には聞こえました。それでも、まだ数曲しか聴いていなかったのもう少し辛抱しようと思いました。

そう考えているうちに、アフリカ風の服装の黒人男性が、コーラを抱えて入店してきました。「コーラ」というのは、コカコーラではないですよ。コーラというのは大きな瓢箪でできた西アフリカの楽器で、ハーブにもリュートにも多少似ているところがありますが、アフリカ西海岸の国々——例えばマリ共和国やセネガルやコートジボワール共和国など——でよく弾かれる楽器です。たまたま私は昔から、このコーラという楽器の音が気に入っており、あるいは入店した男はバンドの知り合いで、後でステージに上がって飛び入りで共演するのではないかと勝手に想像して、ちょっと楽しみが増えました。

ところが、その数分後にとんでもないことが起こってしまいました。突然、店内が停電になったのです。バンドが使っていたアンプやマイクなどが、このぼろぼろの店の電気容量に負担をかけすぎて、停電したようです。それに対する店員たちの表情は、驚きというよりも「またか？」というような、諦め半分、しらけ半分の様なものでしたが、きっと慣れていて復旧処理も早いだろうと思い、周りの客に倣って、しばらく待つことにしました。

非常用の照明は多少つきましたが、何せ電子楽器の多いバンドですから、止むを得ず演奏は中断されました。5分ほど経っても電気がつきません。そうしたら突然コーラを抱えていた男が一人でステージに上がり、楽器をいじり始めました。

コーラの音色は、言葉でなかなか説明しにくいものです。西洋のハーブにもリュートにも似ているところはありませんが、コーラの音色はもっと素朴でありながら、私の耳にはもっと明るく聞こえます。一言で描写するならば「太陽の音」と呼びたいです。楽器の奏法も、リュートより音数が多いけれど、西洋のハーブより「リズムック」なものだと言えるでしょう。(ここでコーラの音楽が流れる) こういう音です。これは二人のコーラ奏者のデュオです。またコーラは、ここにはヴォーカルは入っていませんが、普通「グリオ」と呼ばれる吟遊詩人の楽器として知られています。そのグリオの役割は、日本の伝統音楽に例えれば、恐らく琵琶法師に近いのではないかと思います。

さて、ステージに上がったコーラ奏者が楽器を軽くいじっている間に、今度はバンドのハーブ奏者がステージに上がりました。彼女は椅子に座り、自分の楽器を抱えて、ちょっと音を出しながら、無言で、つまり目だけでコーラ奏者を誘い、それから即興による共演が始まったのです。

主に室内楽器として発展し、定着してきた西洋のハーブと、暑い太陽にさらされながら弾かれるコーラ、アフリカのハーブ。世界中探しても、ほとんどコーラとハーブのデュオという共演は見当たらないでしょう。たまたま、この偶然の共演のおかげで、私はそれぞれの楽器の特徴をより鮮烈に味わうことができ、同時に予想外の音楽的世界を多少垣間見ることができたような気がします。

この何十年にわたり、色々なライブ演奏を聴いてきましたが、これほどの奇遇による感動はなかった、といっても過言ではありません。しかも無名のミュージシャンによるものだったので、なお更です。結局あの晩、店内の停電のおかげで、共演者と聴衆との間に新たな電流が走り出したというわけです。

ところが、そのうちに店内には電気がつき、バンドは演奏を再開しました。でもそれは言うまでもなく、先ほどの二人が見事に築き上げた音の世界とは比べ物にはなりません。私は途中で帰ってしまいました。あまりにも感動的な響きを消したくなかったからです。

今日ここで、音楽を通して、違う文化との「出会い」という問題に多少触れました。32年前の、私個人のジャズ喫茶との出会いをまずご紹介しました。

新宿の路上までジャズの音を流していたスピーカーに誘導され、あの怪しい階段を下りてしまったら、もう後に引けませんでした。暗い空間の中で、無言で強烈な音量のレコードを聴くという、日本独自の音楽空間。私はそれを一種の異文化として体験したおかげで、今、違う視点をもって語ることができるのではないかと思います。

しかし、普通の日本人客にとっても、ジャズ喫茶というのは異文化と接触する場であった、ということも指摘させていただきます。ただし、彼らの場合、日本の「異文化」とはアメリカ、またはアメリカの中の黒人文化だったのです。

ジャズ喫茶での「出会い」は、レコードとスピーカーという音源技術を通して行われます。一方、私がたまたま体験したパリでのコーラとハーブによる共演は、逆に「停電」という、音源技術の故障が可能にしたわけです。それはまさに生演奏ならではの出来事でした。そのとき、その場にいなかったら、二度とその音に出会うことができなかつたのですから。仮にあの二人の奏者が、あれから例えばデュオのCDを出したり、コンサート・ツアーに回っても、やはりあの瞬間の、まったくの偶然による音の出会いから生じた驚きと情熱は、なかなか再現できないでしょう。

だからこそ、そのとき、その場に居合わせることができた一人として、私は大変恵まれているといまだに痛感しています。あの音が、永遠に自分の中に響き続けるでしょう。そして今日、そのときの体験を語ることによって、ハーブとコーラの重なり合う音が、皆様の想像の中にも、かすかに鳴り始めるならば、これ以上の幸いはありません。

長い間ご静聴くださいまして、どうもありがとうございました。

「現代日本の音楽と文化」

～様々なジャンルの「受容」で育まれた音楽の力～

平成20年10月11日(土) 15:05～17:30 東京国際交流館プラザ平成 国際交流会議場

フォーラム初日の第2部はジャズ、クラシック音楽、邦楽の各界から第一線で活躍している音楽家等を招き、青木保文化庁長官の座長による「現代日本の音楽と文化」をテーマにした座談会が行われた。

冒頭、青木座長は、日本ほど様々な音楽が演奏され聞かれる国は他に類を見ないと述べ、その一例としてクラシック音楽から民謡など様々な分野の音楽、20曲を紹介した。日本の文化は「混成文化」であり、広い受容性を持つだけでなく異質なものと共存ができる、いわば「文化の対立・衝突」が指摘される21世紀の文化のあり方における重要なモデルになりうる、という自身の考えを述べた上で、現代日本の音楽の特徴、可能性、問題などについて各パネリストの意見を求めた。

オーケストラ・ニッポニカ音楽監督であり、ベトナム国立交響楽団指揮者でもある本名徹次氏は、日本は歴史的背景から、昔から遠くの国の文化に強い興味を持っており、それが異文化受け入れにつながったのでは、との考えを述べた。また、自身の日本でのアマチュアオーケストラ指揮の経験から、日本のアマチュアオーケストラ文化は世界に誇れる文化であると述べた。

次に、角田健一ビッグバンドリーダーであり、作・編曲家である角田健一氏は、自身のジャズ音楽との出会い、ジャズの歴史・特徴を述べた上で、武満徹作品との出会いと感動から、アメリカのジャズの真似をしても意味がない、日本人である自分らしいジャズ、日本的ジャズを確立したいと考え、努力している旨を語った。

笙を演奏しながら登壇した笙奏者の宮田まゆみ氏は、奈良時代に中国から伝わり平安時代の貴族が日常的に楽しんだという笙の歴史を紹介した上で、千年以上の伝統を持った古典音楽であっても、今を生きている音楽として伝えていきたいと語り、ドイツ人ブラッツ作曲の「線香花火」の演奏を披露した。

開会基調講演を行ったミネソタ大学教授、マイク・モラスキー氏は、国籍と文化は必ずしも一致するものではないと指摘し、国や文化を意識して音楽を作る必要はないのではないか、という問題提起を行った。これに対し、各パネリストから様々な意見が出たが、本名氏は「日本人であるということを忘れない」というのが現代日本の音楽のキーポイントではないかと述べ、宮田氏からは、雅楽は伝統音楽ではあるが、枠にはまらない「宇宙、または未来から響く音楽」のように感じているという発言がされた。

ブラジルのボサノバやサンバは全世界的に愛される音楽として発展してきているが、日本はそのような音楽を生み出しているか、また、日本の風景を思い浮かべるような音楽が日本の音楽であるのか？という座長の問いかけに対して、武満徹はその1人であろうという意見が出た上で、現代の日本文化の代表はアニメ、漫画、日本料理などで、音楽の面で世界を席巻するようなものはないが、アジアにおける演歌やJポップ人気も見逃せないという見解も示された。

さらに、日本の音楽は今後どのように発展していくべきか、また今後の発展のためにどうしたいか、という問いかけに対しては、モラスキー氏は、色々な方法で地味でも充実した活動をしていければ良いのではないかと述べ、角田氏は、日本人である角田健一しかできない音楽を地味でも淡々と続けていきたいと語った。また本名氏は、日本はアジアの中でリーダーシップをとり音楽を活性化していくべきであるとし、更なる人の交流の推進の必要性を語り、宮田氏は、自分の好きな音楽を見つけることができるように、幼少の時から様々な音楽を聴く機会、演奏する機会を増やしていく必要があると述べ、文化庁関連事業についても紹介した。

最後に青木座長は、日本は自由な文化の創造の場所であり、その日本に世界の音楽家が訪れ演奏したり、創造したりする、アジア、更には世界における音楽文化創造の大きな中心拠点となることを望みたい旨発言し、座談会を締めくくった。

座談会終了後、角田健一ビッグバンドによる5曲のジャズ演奏が行われ、本フォーラム初日は閉幕となった。

座談会 II

「古典に生きる」

～未来を拓く古典、『源氏物語』～

座談会Ⅱ

「古典に生きる」

～未来を拓く古典、『源氏物語』～



『源氏物語』は世界最古の長編小説であり、日本文学史上の代表的な作品である。人間にとって永遠で普遍的な問題を、いまなお強く訴えかけてくる力を持っている。『源氏物語』を始めとする古典が後世の日本や世界の文化に与えた影響を検証し、次の世代へどのように繋いでいくかを論議していく。

開催概要	プログラム
<p>■日時 平成20年11月9日(日) 13:30～17:30</p> <p>■会場 宇治市文化センター大ホール (京都府宇治市折居台1-1)</p> <p>■主催 文化庁、源氏物語千年紀委員会、 日本経済新聞社、京都新聞社、NHK、 関西元気文化圏推進協議会</p>	<p>13:30 開 会</p> <p>挨拶</p> <p>基調講演:ロイヤル・タイラー</p> <p>(休憩)</p> <p>討 論</p> <p>総 括</p> <p>17:30 閉 会</p>

宇治市文化センター



宇治市文化センターは、昭和59年に中央図書館・中央公民館・歴史資料館・文化会館の4館で構成された複合施設として開設され、市民の文化・芸術の普及・振興、生涯学習・社会教育活動の拠点となっている。文化会館は、音楽・舞踊・演劇・映画等の上演・上映に対応できる大・小ホールその他、リハーサル室、練習室を備えた多目的ホールとして、豊かで高いレベルの文化芸術の鑑賞機会を提供するとともに、幅広い市民文化団体等の活動拠点・発表の場として施設を開放し、市民文化の向上に大きな役割を果たしている。



芳賀 徹

京都造形芸術大学名誉学長、東京大学名誉教授

はが とおる

1931年生まれ。京都造形芸術大学名誉学長、東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授、岡崎市美術博物館館長を兼任。18世紀から明治維新を経て、20世紀までの日本の文学、思想、芸術の歴史を、諸外国との接触、交流、対立、相互触発の関係の歴史のなかで再構築する論考を展開。主な著書に『大君の使節』(中公新書)『渡辺崋山——優しい旅びと』(淡交社)『みだれ髪の家系』(美術公論社)『平賀源内』(朝日新聞社)『絵画の領分』(朝日新聞社)『与謝蕪村の小さな世界』(中央公論社)『詩歌の森へ』(中公新書)など。



ロイヤル・タイラー

元オーストラリア国立大学教授

オーストラリア

1966年米コロンビア大学にて日本史の修士号を、1977年に日本文学の博士号を取得。2000年に大学教授を引退したタイラー氏は日本古典文学の翻訳で知られている。『源氏物語』の完訳は2001年に出版され、2002年の日米友好基金日本文学翻訳賞を受賞した。2007年に国際交流基金賞を受賞。2008年には旭日中綬章を授与された。現在も日本古典文学の翻訳の活動を続けている。



張 龍妹

北京外国語大学日本学センター教授

チャン・ロンメイ
中国

1998年東京大学人文社会科学研究科博士課程修了、博士(文学)取得。同年北京日本学センターに勤務し、現在同センター教授。『源氏物語』を中心とする平安文学を専攻。個人研究とともに、中国における日本古典の普及に力を入れ、国際シンポジウムの開催、入門書の翻訳、編集などを行ってきた。



カイ・ニエミネン

翻訳家、詩人

フィンランド

1950年生まれ。フィンランドの詩人、また、英語やスウェーデン語、ドイツ語などの翻訳家、とりわけ日本文学の優れた翻訳家である。15冊の詩集の他、翻訳詩や劇作・小説や短編、エッセイなど50冊近い本を出版している。その中には日本の古典、吉田兼好の『徒然草』や、一休や良寛の和歌・漢詩、山頭火の自由律の俳句、能の謡曲本、近代文学の谷崎潤一郎、太宰治、川端康成や三島由紀夫などの翻訳も含まれる。尚、『源氏物語』に関しては現在も翻訳中である。1978年、82年、91年には彼の翻訳に対して、1986年、90年には詩集に対してそれぞれフィンランド政府賞が贈られた。1997年に国際交流基金特別賞、1999年には由緒あるエイノ・レイノ賞、2003年には秀逸な純文学翻訳作品を称えて贈られるミカエル・アグリコラ賞等、多数受賞。



龐谷 壽

同志社女子大学特任教授

おぼろや ひさし

1939年生まれ。同志社大学文学部卒業後、平安博物館助教授・同志社女子大学教授を経て現職。源氏物語アカデミー監修者、紫式部顕彰会理事、国際京都学協会常務理事。2005年に京都府文化賞(功労賞)を受賞。主な著書に『清和源氏』(教育社)、『藤原氏千年』(講談社)、『源氏物語の風景』(吉川弘文館)、『平安貴族と邸第』(吉川弘文館)、『藤原道長』(ミネルヴァ書房)がある。



山本 淳子

京都学園大学教授

やまもと じゅんこ

京都学園大学人間文化学部にて、日本古典文学の教鞭を執る。専門は平安時代の和歌と日記。特に紫式部の和歌と日記について、精力的に研究を発表する。京都大学文学部卒業。1999年、京都大学大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。著書『紫式部集論』は学位論文に拠り、紫式部研究におけるこの和歌集の重要性を説く。また、『源氏物語の時代——一条天皇と后たちのものがたり』により、2007年、サントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞した。

開催記念写真



青木保文化庁長官の挨拶



山田啓二京都府知事の挨拶



久保田勇宇治市長による歓迎の辞



古典を学ぶ重要性を熱く語る
芳賀徹座長



自身の経験を語る
タイラー氏



中国における古典教育について話す
張龍妹氏



基調講演を行うロイヤル・タイラー氏



和やかに進行を務める
山本淳子氏



『源氏物語』の魅力語る
カイ・ニエミン氏



史学者の立場から解説する
麗谷壽氏



熱心に聞き入る参加者たち



座談会の舞台全景

「古典に生きる」～未来を拓く古典、『源氏物語』～

平成20年11月9日(日) 13:30～17:30 宇治市文化センター大ホール (京都府宇治市)

源氏物語千年紀である今年、『源氏物語』をテーマとした座談会が開催された。本座談会は源氏物語千年紀を記念して開催された一連の「源氏物語国際フォーラム」の最後を締めくくる座談会でもあり、『源氏物語』ゆかりの地である宇治市で行われた。

冒頭、元オーストラリア国立大学教授のロイヤー・タイラー氏による「世界のなかの『源氏物語』」と題した基調講演が行われた。タイラー氏は、『源氏物語』が愛読されている領域は世界的に広がっていると述べ、多くの読者はこの物語の作中人物に自分を重ね合わせ、人生の難局に直面したとき、ここから学ぶことも多いと話した。また『源氏物語』の翻訳によって教えられたことは、いまだ十分に意味が理解されていない部分が残っているということであり、それを解決するのは翻訳作業での難しさであり、楽しみでもあると語った。『源氏物語』は、日本人はもちろん外国人にとっても、その価値や面白さが十分伝わる作品であり、世界文学の基本的な古典になっていることは間違いないとし、最後に鎌倉時代の「源氏物語歌合」の原文を引用し、『源氏物語』に対するこれ以上の賛辞はないと締め括った。

「昔、上東門院の女房むらさき式部ときこえしかつくりいてたりける光源氏の物語、なすらふるたくひはまれならむ。こと葉は春の花、木々の梢にはほひをのこし、心は秋の月のちさとのほかまでもくまなかるへし。色をしり、なさけをふくむ家に、いつくにかこれをもてあそはさる。たかきもくたれるも、世にしたかふ人のたれかこの心をまねはさららむ。遊宴のこと葉、餞別のなこり、哀傷の詠、風月の篇、いつれか此中にもれたる。九重の雲のうへより、いやしきしつかきぬたのをとまて、わか国のことわさのみにあらず、こまもろこしのふるきためしをもかきあらはせり。されははしめきりつほに、いつれの御時にかとうちいてるより、夢のうきはしにいたるまで、露ことに袖のいとまなく心をくたかすといふことなし」

続いて6名の国際色豊かな研究者によるパネルディスカッションが開催された。京都造形芸術大学名誉学長の芳賀徹座長による趣旨説明の後、4つの論点(1「『源氏物語』に触れる楽しさ」、2「『源氏物語』からの発見」、3「研究者と一般読者をつなぐもの」、4「古典の日に何をすべきか、どう広げていくか」)から活発な意見交換が行われた。

まず司会を務めた京都学園大学教授の山本淳子氏が、高校教員時代に必ず生徒に教えたのは若紫が登場するシーンで、目の前に浮かぶような表現に触れられるのが楽しみだと口火を切り、芳賀座長は、「もののあはれ」がそれとなく盛り込まれているのが『源氏物語』を読む醍醐味だと持論を展開した。フィンランドの翻訳家・詩人のカイ・ニエミネン氏は、『源氏物語』は詩的であり、万葉集や中国文学など多くの要素が言葉の中に層のようになっており、それを探り当てていくことが楽しく、難しいと述べた。北京外国語大学日本学センター教授の張龍妹氏は、日本では恋愛小説として読まれることが多いが、自身はむしろ高い思想性に魅かれ、普通の人間の悩みを描いたところが興味深いと語り、基調講演を行ったタイラー氏は、『源氏物語』を読むと日本の四季の自然が想像の中に浮かび、「末摘花」に見られるユーモア感覚もいと述べた。さらに同志社女子大学特任教授の臈谷壽氏は、史学者の立場から『源氏物語』が生まれた時代や宇治との関係などを解説した。

『源氏物語』が千年の時を経て日本の文化に多大な影響をおよぼしていることを再確認した上で、『源氏物語』をきっかけに一般の読者に古典に親しんでもらうには何をすればよいのか、という問いかけには、芳賀座長が『源氏物語』は各種の翻訳本など様々な形で出版されているので、一般の読者には自分に合ったスタイルで楽しく読んでほしいと話した。山本氏は学校で魅力的な古典の授業が行われることの必要性を説き、芳賀座長は子どもに古典を朗読させることを提案した。これを受け張氏は、近年中国では古典回帰が言われ、幼稚園から漢詩などを暗記暗誦していると紹介し、タイラー氏も学生時代に暗記させられた古典が大人になるにつれて理解できるようになったので、暗記は大切だと述べ、臈谷氏も古典教育にもっと力を入れるべきだろうと述べた。

最後に芳賀座長は、古典を学ぶことによって普遍性を学び、時代や国境を越えて、心を深く、広くすることができ、国際理解にもつながると総括した。

座談会Ⅲ

「奈良とシルクロード」 ～アジアゲートウェイの未来に向けて～

座談会Ⅲ

「奈良とシルクロード」

～アジアゲートウェイの未来に向けて～

古代からヨーロッパと中国を結び、日本に進んだ技術や珍しい文物をもたらしたシルクロードは、アジアゲートウェイの先駆とも言える。折から奈良は、2010年に平城遷都1300年を迎える。そこで本座談会では、古代のシルクロードにおいて、アナトリアから中国や韓国につながるアジアの文物往来や通商に見られる横の繋がりを、世界史と東西交渉史のなかで画像なども交えて議論したい。

開催概要

■日時 平成20年11月30日(日)
13:30～17:00

■会場 興福寺会館
(奈良市登大路町48)

■主催 文化庁、奈良県、日本経済新聞社、NHK、
関西元気文化圏推進協議会

プログラム

13:30 開会
挨拶
発表
(休憩)
討論
総括
17:00 閉会

興福寺



春日山に連なる丘陵に広がる法相宗の大本山。中臣鎌足の息・藤原不比等によって710年の平城京遷都と同時に造営が始まり、その後天皇や皇后、また藤原氏によって次々に堂塔が建てられ整備された。平安時代には春日社を掌握して大和国を領有し、鎌倉・室町時代には大和国守護を任じられ、幕府の宗教政策が厳しかった江戸時代でも21000石余の朱印が踏襲された。創建より度々の罹災、また明治時代初めの神仏分離令・廃仏毀釈・社寺上地令などで荒廃するが、多くの人々の尽力で復興しその法灯を今に伝えている。現在は、2010年の創建1300年に向けて中金堂の再建立柱を目標に、周辺整備が進められている。



山内 昌之

東京大学大学院教授

やまうち まさゆき

国際関係史とイスラーム地域研究を専攻。発展途上国研究奨励賞、サントリー学芸賞、毎日出版文化賞(2回)、吉野作造賞、司馬遼太郎賞などを受賞。2006年春に紫綬褒章を受章。現在、中東調査会常任理事はじめ、文化審議会、外務人事審議会、アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会、総合資源エネルギー調査会、日本・アラブ対話フォーラム、日中歴史共同研究委員会、日韓歴史共同研究委員会などの委員を務める。また、中東文化ミッション(3回)の団長、小泉元首相の対外関係タスクフォース、安倍前首相の「美しい国づくり」企画会議などの委員も歴任した。



ソルマズ・ウナイドゥン

前駐日トルコ共和国特命全権大使

トルコ

米国ペンシルバニア州プリンマー・カレッジにて修士号を取得。1967年にトルコ共和国外務省に入省し、二等書記官や国連トルコ政府代表部参事官、駐エジプト・トルコ大使館一等書記官、駐スウェーデン王国・ポーランド共和国大使、トルコ共和国海外振興部部長、政策企画部部長などを歴任した後、2003年から駐日トルコ共和国特命全権大使を務めた。2007年1月に大使を退任後、トルコ共和国外務省の特別プロジェクトで2015年イズミル万博招致委員会委員長を務め、現在も同国の次期国連安全保障理事会非常任理事国加盟に向け各国への働きかけを担う。



王 勇

浙江工商大学日本文化研究所所長

ワン・ヨン
中国

1982年に杭州大学日本語科を卒業後、北京日本学術研究センター大学院「日本文化」コースを経て、1996年に総合研究大学院大学「国際日本研究」論文博士号を取得。現職は浙江工商大学日本文化研究所所長、また復旦大学教授を兼任、中国日本史学会副会長を務めている。専門分野は中日文化交流史。とくに東アジアの書籍交流に重点を置き、「ブックロード」を提唱している。主な日本語の単著に『聖徳太子時空超越』(大修館書店、1994年)、『唐から見た遣唐使』(講談社、1998年)、『中国史のなかの日本像』(農文協、2000年)、『おん目の雫ぬぐはばや——鑑真和上新伝』(農文協、2002年)、『書物の中日交流史』(国際文化工房、2005年)などがある。

©共同社



キム・ホドン

ソウル大学教授

韓国

1979年ソウル大学卒業、1986年米国ハーバード大学にて博士号取得。その年からソウル大学アジア史学部にて中央アジア史を教えている。博士論文『中国領中央アジアにおけるムスリム反乱とカシュガル・アミール国家(1864-1877)』の増補改訂版「Holy War in China」(『中国の聖戦』)は2004年にスタンフォード大学出版より出版された。近年主な研究対象を13、14世紀のモンゴル共和国の歴史にシフト。韓国語での論文は多数あるが、英語でも2論文を発表した。ユーラシアにおけるネストリウス派の動きについての本(韓国語)は2003年の韓国最優秀出版賞を受賞した。現在モンゴル時代における中央ユーラシアでのコミュニケーションと文化交流について執筆中。韓国中央アジア研究会会長とソウル大学中央ユーラシア研究所所長を兼務。

開催記念写真



満員の会場内



座談会を進行する
山内座長



熱心に語る
ソルマズ・ウナイドウン氏



ユニークな持論を展開する
王勇氏



真摯に語る
キム・ホドン氏



座談会参加者たち



興福寺の多川俊映貫首による
歓迎の挨拶



橋本弘隆奈良県副知事の挨拶



基調講演を行う山内昌之氏



興福寺境内視察を終えて記念撮影

「奈良とシルクロード」～アジアゲートウェイの未来に向けて～

平成20年11月30日(日) 13:30～17:00 興福寺会館 (奈良県奈良市)

アジアゲートウェイの先駆とも言えるシルクロードにおいて、アナトリアから中国や韓国につながるアジアの文物往来や通商に見られる横の繋がりを、世界史と東西交渉史の中で議論する座談会が、シルクロードの終着点である奈良にて開催された。

座談会前半は、座長を務める東京大学大学院教授の山内昌之氏の基調講演から始まり、各パネリストによる発表が続いた。

山内座長は、興福寺の阿修羅像、東大寺二月堂の「お水取り」、平城京と太宰府、万葉集などのシルクロード文化との関連性に触れ、科学技術や仏法だけでなく、芸術、文物、律令制度、政治外交、安全保障などの面でもシルクロードは日本文化に重要な役割を果たしたと述べた。また、現在でも、東アジアからトルコなど中央アジア、中東にいたるアジアの人々と連携しながら大きなアジアの平和的結びつきを強めるために、シルクロードが重要な役割を果たそうとしていると述べた。

前駐日トルコ全権大使のソルマズ・ウナイドゥン氏は、トルコに於けるシルクロードの今日的な位置づけは、国際交流を築き、持続させることだとし、そのためにトルコは、シルクロード周辺地域に政治的安定を生み出す努力をはじめ、様々な国際協力の分野で努力をしていると述べた。

中国の浙江工商大学日本文化研究所所長の王勇氏は、唐にシルクを求めた西側の「貿易使」に対し、日本の遣唐使は、唐の返礼品のシルクを売って書物を買ひ、日本に持ち帰った「文明使」だったとし、日本と中国が書物を媒介にして文化的類似性を持つに至ったと述べた。

ソウル大学教授のキム・ホドン氏は、東アジアを中国中心の視点ではなく、ユーラシア的視点で見ることで、また、シルクロードを東西の文明を結ぶルートと見るだけでなく、単一の世界史を実現した媒体として見ることによって、東アジア諸国の文化的アイデンティティも正しく理解できるだろうと述べた。

座談会後半のパネルディスカッションでは、「文明の衝突」と言われる状況に対し、各パネリストはどのような立場をとるのかという山内座長からの問題提起を皮切りに、活発な議論が行われた。

ウナイドゥン氏は、キリスト教とイスラム教の相克の歴史を持つトルコとスペインが立ち上げた「文明の同盟」プロジェクトについて触れ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教が理解し合うためには対話や交流が重要であり、他者を理解する努力をしない限り、他者は永遠に他者のままだと述べた。この点について山内座長からは、両国においては政治、軍事により文明の支配が変わっても、モスクや教会など歴史的なモニュメントを壊さずに残して転用するなど、文明の基礎は継承し、その上に新しい歴史が作られている旨指摘された。

王氏は、唐が摩擦から生まれるエネルギーを上手く利用したことを「^{どんと}吞吐」と名付け、文明の衝突をプラスに理解することもできると指摘した。唐の華やかな文化はオリジナルではなく、すべて外国から伝わった物だという研究を紹介した上で、唐はシルクロードを介して多くの物を呑み込み、韓国や日本に吐き出したが、このような「^{どんと}吞吐力」こそ文化力だという考えを述べた。この発言を受け、山内座長から、文明の衝突がプラスに作用した例として、唐とイスラム帝国がタラス河畔の戦いで衝突した結果、「紙」という巨大な文化遺産がイスラム世界、ヨーロッパへ至るといふ文明的な達成を果たしたと言えとの事例が紹介された。

キム氏は、タラス河畔の戦いで唐の将軍、高仙芝は高句麗の出身だったことを例に、シルクロードのダイナミズムとは、違った文明が双方に様々な変容するプロセスにあると述べた。また、アフラシャブ遺跡の高句麗人の壁画に見られるように、古くはシルクロードを通じて朝鮮と中央アジアとの交流があったが、儒教を取り入れて以降、その扉は閉じられてしまった、そして今、儒教の時代が終わり、私たちは民族のアイデンティティを再定義しなければならない時期に来ているが、シルクロードは幅広い観点からそれを可能にする見解を述べた。

山内座長は、人がアイデンティティを考えるにあたり、血や人種で考えるのではなく、文化、宗教、言語、そして懸命に生きようとする意志、一緒に生きる共同体への関わりで考えることが重要だと指摘した上で、最後に、シルクロードを骨董や趣味だけでなく、本質的な人間の営みとして捉え、現代においてどう掘り取っていくのか、未来の私たちへの指針はどういうものなのか、という観点で考えることの必要性を訴え、座談会は終了した。

「源氏」普遍的な魅力

奈良市の興福寺で十一月三十日に開いたセッションは「奈良とシルクロード」をテーマに「源氏の未来に向けて」をテーマに、ヨロップから中国を経て韓国、日本につながる大きな交流のゲートウェイ(玄関口)であり続けたシルクロードを主題に、内外の第一級の知識人が議論を交わした。東西交渉史やアジア史を見据えながら政治、文化、経済、民族のアイデンティティと、話題は広範に広がった。

座談会 奈良とシルクロード

11月30日 奈良・興福寺会館



山内 昌之氏

アジアのゲートウェイ

歴史に輝いている。この討議では世界史と国際交渉史の観点からも、この道をとらえ直したい。東アジアという枠を超えユーラシア大陸と日本との関係にも視野を広げて論じ合えば、日本にも大きな知恵をもたらす、シルクロードに縁がある地域の平和的な結び付きを確認でき、世界平和の礎にもなる。

奈良の平城京は唐の長安をモデルに造られた。長安は世界に冠たる大都市で、海のシルクロードを通じて遣唐使が唐に赴き、長安から制度や法律や文化を学んだ。その果実が平城京だった。こうして古い交流の歴史にも思いを致したい。

国際文化フォーラム特集

源氏物語千年紀の今年には多彩な行事が目白押しだった。十一月九日に京都・宇治市文化センターで開いた「古典に生きる、未来を拓く」は、「源氏物語」は、その締めくくりにともなう行事。内外のゲストが「源氏」の魅力を多角的に語り合い、古典の持つ普遍的な力を再確認した。(敬称略)

座談会 古典に生きる

11月9日 京都・宇治市文化センター



文化庁 第6回 国際文化フォーラム (源氏物語国際フォーラムⅡ)
テーマ「古典に生きる」～未来を拓く古典、『源氏物語』～

意見を交わすパネリストら



前駐日トルコ特命全權大使

ソルマズ・ウナイドゥン氏

シルクロードは陸の道として古くから栄え、東から西に主に絹を運び、西から東には羊毛、ガラス、貴金属などを運んだ。貿易のほかに文化も運び、文明の発展に大きく寄与した。

十七世紀ごろから香辛料を運ぶ海運が台頭して、海のシルクロードに主役を譲

平和なくして発展なし

だが、二十世紀後半にソ連が崩壊して、中国が経済政策を開放型に変えたことで、陸のシルクロードは新たな時代を迎えたが、発展を阻害する要因がある。

アフガニスタンやパキスタンの一部で政情が不安定だ。イラン、イラク、パルカン諸国も問題を抱えている。平和、安全保障、人権が守られないとシルクロードは活性化しない。鉄道と道路の整備も不可欠だ。

トルコは国連の一員として、また独自の責任で平和のために懸命に取り組む、インフラ整備にも力を入れていく。平和を希求する外交戦略に積極的な日本とも一層、連携を強めたい。

ソウル大教授 キム・ホドン氏



ユーラシア的視野で見直しを

中国、韓国、日本に共通の文化があるとする「東アジア文化圏」は漢民族中心の世界観と王朝志向型の歴史観に基づくもので、歴史の事実をゆがめる恐れがある。

シルクロードは東アジア線ではなく、面であり、空と世界を大きく見る視野を与えてくれる。東アジアからアフリカ、ユーラシアの大陸を結び、大きな文明のコミュニケーション・ネットワークだ、と認識されるようになった。

二十世紀の最後の四半世紀にシルクロードの議論が高まり、学術的な成果も生んだ。さらに、この道を東西だけでなく南北で考え、

仏典を日本へ持ち帰る

シルクロードはブツクロだった。ヨロップの地理学者が約二千年前、シルクロードを定義した。唐の長安からイスタンブールをつなぐ狭い概念だった。発祥は紀元前二五〇年ごろ。日本の弥生時代前中期のことだ。

唐の絹を西域の国々が買っていたために開いた。唐が二百一十一年もあつた。正倉院には唐代の写経が二百一十一年もあつた。中国では敦煌に残っているが、いったん土の中に埋められ掘り出した物だ。正倉院の写経は約千年間も人々に影響を与え続けてきたことに私は感動して、交易と文化交流の道だったシルクロードの意義を考えるうえで示唆に富む話だ。



王 勇氏

浙江工商大(中国) 日本文化研究所所長

授業で朗読 良さを感じて

山本 源氏物語の千年紀の式典で十一月二日を「古の式典」とする宣言がなされた。源氏物語をきっかけに古典に親しんでもらおうという趣旨だが、何をすればいいか。

芳賀 家庭で子どもに古典を朗読させ、学校では新学期が始まる時、先生が全校生徒に読んで聞かせた。

張 中国は近年、古典回帰がいわれ、幼稚園から漢詩などを暗記させる。私の子どもも三歳から幼稚園に通って週に一つ、暗記していた。

芳賀 偉いねえ。(笑い) 張 三歳なのに「国破れて山河あり」。(笑い) タイラー 高校時代、古典を暗記させられたが、大人になるにつれ、文学の価値を理解できた。

藤谷 ひと昔前までは古典で情操教育を、という機運があったが、廃れた。殺伐とした事件が続発する遠因かもしれない。文部科学省がもっと古典教育に力を入れるべきだ。

山本淳子(京都学芸大学 教授、司会) 源氏物語に触れる楽しさを語り合っから始めた。源氏物語には時々、情景が目浮かんでくるようなシーンがある。例えば、幼い若紫がスズメの子を捕まえておいたの「大君が逃がしちゃった」と走って髪を祖母に訴える場面。「髪は扇を広げたるよにゆらゆら」とあって、若紫の姿がぼつと目に浮かぶ。

芳賀徹(京都造形芸術大学 学名譽学長) 豊かな細部が素晴らしい。宇治十帖の中の「東屋」で、浮舟が多く男性に言い寄られるのに嫌気して京都・三条のしもた屋に逃れる。ある晩、そこに薫が忍んできて二人は契りを結ぶ。

翌朝、暗いうちに若い二人は薫の牛車で宇治に戻る。山越えて宇治に下る途中、夜が明けて朝日がさつと差す。薫が浮舟を抱き寄せ、二人の着物が車の外にひらひらとあふれる。実にきめ細かな記述です。

カイ・ニエミネン(フィンランドの翻訳家、詩人) 源氏物語には四季の風景の移ろいが見事に思いついてる。それが詩のような散文で書かれていて、和歌も

山本 源氏物語の千年紀の式典で十一月二日を「古の式典」とする宣言がなされた。源氏物語をきっかけに古典に親しんでもらおうという趣旨だが、何をすればいいか。

芳賀 家庭で子どもに古典を朗読させ、学校では新学期が始まる時、先生が全校生徒に読んで聞かせた。

張 中国は近年、古典回帰がいわれ、幼稚園から漢詩などを暗記させる。私の子どもも三歳から幼稚園に通って週に一つ、暗記していた。

芳賀 偉いねえ。(笑い) 張 三歳なのに「国破れて山河あり」。(笑い) タイラー 高校時代、古典を暗記させられたが、大人になるにつれ、文学の価値を理解できた。

藤谷 ひと昔前までは古典で情操教育を、という機運があったが、廃れた。殺伐とした事件が続発する遠因かもしれない。文部科学省がもっと古典教育に力を入れるべきだ。

内外の著名な文化人・芸術家が関西及び東京に集い、「文化の多様性」を共通テーマに世界に向けて文化のメッセージを力強く発信します。

People from Japan and around the world renowned for their artistic and cultural achievements will come together in the regions of Kansai and Tokyo to deliver powerful cultural messages under the overarching theme of "Cultural Diversity."

